

1. 評価結果概要表

【評価実施概要】

事業所番号	3170200913		
法人名	社会福祉法人 養和会		
事業所名	グループホーム 仁風荘一番館		
所在地 (電話番号)	鳥取県米子市上後藤8-9-23 (電話) 0859-24-9111		
評価機関名	有限会社 保健情報サービス		
所在地	鳥取県米子市西福原2-1-1 YNT第0ビル 111号		
訪問調査日	平成21年5月14日	評価確定日	平成21年5月28日

【情報提供票より】(平成21年5月1日事業所記入)

(1) 組織概要

開設年月日	平成12年 4月 1日		
ユニット数	1 ユニット	利用定員数計	9 人
職員数	10 人	常勤	9 人, 非常勤 1 人, 常勤換算 8 人

(2) 建物概要

建物形態	単 独	新 築
建物構造	木 造 造 り	
	1 階建ての	1 階部分

(3) 利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃(平均月額)	30,000 円	その他の経費(月額)	700 円	
敷 金	無			
保証金の有無 (入居一時金含む)	無	有りの場合 償却の有無	無	
食材料費	朝食	円	昼食	円
	夕食	円	おやつ	円
	または1日当たり		1,050	円

(4) 利用者の概要(5月1日現在)

利用者人数	9 名	男性	名	女性	9 名	
要介護1	0	名	要介護2	1	名	
要介護3	4	名	要介護4	4	名	
要介護5	0	名	要支援2	0	名	
年齢	平均	82 歳	最低	79 歳	最高	91 歳

(5) 協力医療機関

協力医療機関名	養和病院
---------	------

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

米子市内を流れる米川沿いに建つグループホーム仁風荘一番館は、隣接して授産施設、グループホーム仁風荘二番館が、また近隣にも運営母体である養和会の養和病院、介護老人福祉施設、他の施設が建ち並び、共に連携をとりながら地域に根ざした施設を目指している。施設長は、県西部地区の認知症介護支援アドバイザーであり、ケアに対する思いはひとかたならぬものがある。利用者は日々思いおもいに過ごしながらも、入念なアセスメントに裏打ちされ、持てる力を出来る限り引き出す支援を受けている。利用者を大切にするとともに職員のケアもまた大切にされており、職員は利用者の笑顔に元気をもらいながら、活き活きと働くことに喜びを感じている。また現状にとどまることなく、さらに利用者と家族の安心と満足を図るため向上してゆくこと、そして得られたことをホームの外へ向けて発信してゆきたいとの意向を持っている。

【重点項目への取り組み状況】

重点項目 ①	前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況(関連項目:外部4)
	市との関わりが単方向的であることが課題となっていたが、法人の養和病院が認知症医療疾患センターに位置づけられたことをきっかけに、市の担当課と双方向的な関係作りが期待されている。
重点項目 ②	今回の自己評価に対する取り組み状況(関連項目:外部4)
	職員は評価における意義を理解し、活かしている。主な職員は自己評価に関わり、項目を通して日々の実践の振り返りを行っている。評価結果について、会議、カンファレンスで報告がなされている。
重点項目 ③	運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み(関連項目:外部4, 5, 6)
	運営推進会議は3カ月に1回開催されている。会議のネーミングを親しみやすいものに変更し、より多数の家族の参加が実現している。利用者家族の3分の1が出席という実績がある。内容として運営に関する報告、介護報酬改定に関する説明、意見交換などが行われ、主に利用者家族と職員の相互理解を深める機会となっている。このたび市の長寿社会課担当者も21年6月よりホームの運営推進会議と位置づけられている会議に参加予定、双方向的な関わりが期待されている。
重点項目 ④	家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映(関連項目:外部7, 8)
	「家族と職員の会」を通して家族の思いや意見を傾聴し、真摯に受け止め対応している。法人本部の品質管理委員会にて、顧客満足度アンケート調査、意見箱の設置が行われている。意見、苦情についての対処方法、改善結果についての報告が事業主内の掲示で確認されている。年1~2回の不定期で家族宛の自主的なアンケートを実施、また外部評価のアンケート結果も併せてサービスの向上に反映させている。
重点項目 ④	日常生活における地域との連携(関連項目:外部3)
	自治会に加入し、公民館祭出展をはじめ、公民館活動に参加している。地域の保育園・小学校との交流、中学生の職場体験の受け入れの他、小中学校の人権教育において、地域で高齢者を支える取り組みについての講演を行っている。校区内の保健推進委員をホームが、また地元消防団を法人が担っており、地域との密接な信頼関係を築いている。また地域に多くの待機家族を抱えており、折にふれて連絡を取り、相談のするなど地道な取り組みをしている。

若い男性職員が利用者に魚のさばき方や編み物2. 評価結果(詳細)

(部分は重点項目です)

取り組みを期待したい項目

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
I. 理念に基づく運営					
1. 理念と共有					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	地域とともに在り、地域に貢献し続ける趣旨を持つ法人の理念をふまえた、グループホーム独自の理念を作られている。		
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	管理者と職員は、日々理念を念頭において「利用者一人ひとりの自分らしさ」を探すことに積極的に取り組んでいる。		管理者及び職員は、「自分が利用したい施設」を目指し、理念の実践に向けて取り組んでいる。職員一人ひとりが「自分が利用したい施設」に明確なイメージを持っている。
2. 地域との支えあい					
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	自治会に加入し、公民館祭出展をはじめ、公民館活動に参加している。地域の保育園・小学校との交流、中学生の職場体験の受け入れの他、小中学校の人権教育において、地域で高齢者を支える取り組みについての講演を行っている。校区内の保健推進委員をホーム職員が、また地元消防団を法人が担っており、地域との密接な信頼関係を築いている。		とんどさん祭りで敷地内にて獅子舞を迎えるなど、地域に溶け込んでいる様子が見える。敷地内の授産施設であるカフェあぶりを地域の活動の場として提供している。
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	職員は評価における意義を理解し、活かしている。主な職員は自己評価に関わり、項目を通して日々の実践の振り返りを行っている。評価結果について、会議、カンファレンスで報告がなされている。		
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議は3ヶ月に1回開催されている。会議のネーミングを親しみやすいものに変更し、より多数の家族の参加が実現している。利用者家族の3分の1が出席という実績がある。内容として運営に関する報告、介護報酬改定に関する説明、意見交換などが行われ、主に利用者家族と職員の相互理解を深める機会となっている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	米子市保健所認知症対策実務者会、米子市長寿社会課認知症対策会議に参加。施設長が鳥取県西部地区認知症介護支援アドバイザー、鳥取県認知症介護研修スタッフである。職員は、市と協同して「認知症サポーター養成講座」を開くキャラバンメイトとなっている。		このたび同法人の養和病院が認知症医療疾患センターに指定され、さらに市との連携が予想される。市の長寿社会課担当者も21年6月よりホームの運営推進会議と位置づけられている会議に参加予定、双方向的な関わりが期待されている。
4. 理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々に合わせた報告をしている	毎月、利用者の様子と金銭に関する報告が請求書に添えて郵送されている。利用者家族はわずかな時間をやりくりしながらも、少なくとも1ヶ月に1～3回程度グループホームを訪問しており、利用者の近況を口頭にて報告を受けている。また「家族と職員の会」を通して運営上の事柄をはじめ報告が行われている。		
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	法人本部の品質管理委員会にて、顧客満足度アンケート調査、意見箱の設置が行われている。意見、苦情についての対処方法、改善結果についての報告が事業主内の掲示で確認されている。年1～2回の不定期で家族宛の自主的なアンケートを実施、また外部評価のアンケート結果も併せてサービスの向上に反映させている。		平成20年11月に立ち上げられた「家族と職員の会」において家族の要望や相談を聴き、ホームのケア検討課題としている。
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	栄養士、作業療法士等の必要な人員については、部署長面談にて要請をおこなっているが、職員の異動は利用者へのダメージを配慮し、近年職員の異動は無い。以前、職員の異動があった時は、お便りや家族会においても紹介されている。		
5. 人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員一人ひとりについて、半期に一度「目標管理シート」の作成を行い、それぞれの経験や課題に合わせて目標設定をし職員を育てる取り組みを行っている。個別に課題が明文化されており、段階的な育成の支援となっている。		基本的に施設内での課題は施設内で解決する方針であり、外部研修に頼ることなく、職員の育成を行っている。このことは、施設長が認知症介護指導者であるため、職員教育におけるシステムが独自に確立している事が確認できた。
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	鳥取県グループホーム協会の相互研修に参加。認知症介護研修、研究センターネットワーク、認知症介護指導者ネットワークを通じて同業者との交流が行われている。		管理者も職員も、現状に満足してとどまることなく、今後も交流を続けることにより研鑽を積むことを希望している。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心して、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	入居前に家族と十分に相談を行い、グループホームでの生活を一緒に過ごす事前の生活体験を行っている。施設からの入居の際の送迎など、初期の関係作りにおいても、配慮が行われている。待機者についても、在宅生活における様子の把握や相談、あるいは家族会への参加が実際に行われている。		
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながら喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	日々の暮らしを職員も利用者と共に楽しんでいる。若い男性職員が利用者に魚のさばき方や編み物を習う場面などが訪問日に伺うことが出来た。人生の先達者として敬っている。利用者との会話や笑顔に職員が励まされ、職員自身が与えられていると感じている。		多くの職員が利用者や家族と共に旅行や温泉行き、お菓子作り教室など、楽しみたいことを心の中で育てている。
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
1. 一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	独自で作成した「かもしれないチェックシート」を活用し、職員はコミュニケーションを図りながら、観察を怠ることなく、利用者の思いや意向の把握に努めている。現在の「かもしれないチェックシート」の完成に行き着くまでに各々の項目について数々の思考錯誤、改良を重ねている。本シートは活用することによって意味があるため、職員は常にきめこまやかな視点で利用者の観察を続けていることが評価される。		
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している	利用時の希望、意向、利用者の希望等を独自のかもしれないチェックシートを使用し介護計画原案を作成している。介護計画は本人及び家族の参加を原則として関係者で話し合い、作成されている。本人、家族の希望を反映した計画になっている。プランに基づき、一人ひとりの利用者の安全安楽をふまえて残存機能を最大に活かした支援をするために、個別の場面の手順が詳細に記されている。		
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	3ヶ月に一度、定期的な評価・見直しを行い、急な変化があればその都度見直しを行っている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
3. 多機能性を活かした柔軟な支援(事業所及び法人関連事業の多機能性の活用)					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	自主サービスとして、かかりつけ医への受診介助、入所時の移送サービス、家族と共にホテルでの夕食会及び夜景ドライブ等柔軟なサービスを行っている。また待機者家族に相談等の支援を行っている。介護保険サービスとして、医療連携体制を活かし、利用者にとって負担となるような受診や入院の回避等の支援を行っている。		グループホームにおけるデイケアの実現化を行政に要請してゆく意向である。
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域支援との協働					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人および家族の希望する在宅時代からのかかりつけ医への受診・往診を大切にしており、柔軟に対応している。また、家族が受診同行する場合にも不安の無いように情報提供等連携をとっている。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	終末期について話し合いを利用者家族で行っている。ホームにおいて実際に1例の看取りを体験した。職員は、終末期における意識の共有がはかられている。施設長は、日ごろからケアをする側である職員のケアを行うことの大切さを認識しており、ターミナル期においてもその延長上にあると考えている。		
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
1. その人らしい暮らしの支援					
(1)一人ひとりの尊重					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	利用者一人ひとりに親近感を持ちながらも、丁寧な声かけがなされていた。ホーム全体で取り組んでいる「かもしれないチェックシート」においてスタッフ自身に向けてのアセスメントは、利用者の誇りを尊重することに通じている。職員は、法人が実施する人権、身体拘束、個人情報保護に関する研修を年1回受講している。個人ファイルをはじめとする利用者情報は適切に管理されている。		
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	グループホームのサービスの基本のひとつ「日課を押しつけず、意思を尊重し、選択肢を多く提供します」の精神に従い、その時々ニーズを把握し、利用者の思いに沿った支援を行っている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(2) その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者の希望を訊いて献立を作成し、利用者の力量に合わせた調理および配膳下膳の支援を行っている。職員全員が利用者と同じテーブルにつき利用者と同じ食事を取っている。		利用者の作った畑の野菜や近隣からの届け物が食卓に上る。
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	利用者の希望と状態に合わせて、安心安楽な入浴の支援を行っている。夜間入浴については、希望があれば対応できる職員配置になっている。		
(3) その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	利用者の家族から畑を借り、週に2回程度農作業に通う利用者があり、活力を取り戻している。調理から盛り付け、配膳下膳、片付けにいたるまでそれぞれ役割を担っている利用者がみられた。編み物や塗り絵、お手玉作りなどの趣味的な楽しみの他、大山へ蕨取りにドライブとその時の流れに乗って活動することもある。笹を取りに行くところから始まるちまき作りなどの伝統食は、昔とった杵柄で利用の得意とするところである。		
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	アセスメント、観察をおこたらず、利用者のその日その日のニーズにあわせて外出支援をおこなっている。ゴミ出しを目標設定とした川沿いの散歩、食品の買出し、利用者の自宅近くでの畑仕事、「思い立ったが吉日」のドライブというふうに、その日の利用者の状態を観ながらきめこまやかかつ柔軟に援している。		
(4) 安心と安全を支える支援					
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	日中玄関、窓等鍵はかけていない。玄関は夕方や20時ごろまで面会があるので職員が見計らい家族帰所後に施錠する。		
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	夜間想定した訓練も含め、年2回非難訓練を実施。法人が地元消防団として位置づけられており、ホームへの支援はもとより、非常災害時において地域を支援する役割を担っている。夜間の緊急時における連絡体制もできており、シュミレーションの確立ができています。同法人内に災害時の備蓄がある。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
(5)その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援					
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事の摂取量はバイタルとともに、健康管理表に記録されており、水分確保についても把握なされている。栄養バランスについてホームの栄養士が定期的に管理をしている。		
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり					
(1)居心地のよい環境づくり					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	ダイニングは落ち着き感のある明るさになっており、心地よい音楽が流れている。トイレは認知症利用者の傾向を理解し、混乱しないようわかりやすい場所に2ヶ所ある。利用者の通う畑にあった花が活けられていたり、手作りのこいのぼりのオブジェが飾られていたり和生活感・季節感を感じられる空間になっている。		
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室には、持ち込みのチェストなどの家具がおかれ、装飾品、利用者の写真、経典などがあり、居心地よく過ごせる設えになっている。必要に応じ、自然の風を入れ換気にも配慮されていた。		